

## 第 20 回連続講演会

### 冒険探検における環境教育について、じっくり語り合おう

#### 高野 孝子 氏

NPO 法人 ECOPLUS 代表・早稲田大学准教授

NPO 法人 ecoplus 代表理事、早稲田大学客員准教授、英国エジンバラ大学博士号（環境・野外教育）「オメガアワード 2002」受賞。

新潟県在住。ジャパンタイムズ報道部記者を経てフリーランス。1992、1994 年と二つの教育団体を立ち上げ、「人と自然と異文化」をテーマに体験を重視した、地球規模の環境・野外教育プロジェクトの企画運営。犬ぞりとカヌーによる北極海横断やミクロネシアの孤島での自らの活動を環境教育の素材とするプログラムを展開。2003 年 NHK「未来への航海」では、アジア 7 カ国の子どもたち 42 名の環境教育プロジェクトを指導し、2008 年夏には日本・タイの学生対象の持続可能性教育プログラムを指導。自身の活動歴には、グレートバリアリーフでのサンゴ礁調査、北極点パラシュート降下やマダガスカル島でのサバイバルレースなど、零下 50 度からプラス 60 度の中での数多い遠征が含まれる。近年はグリーンランドを舞台に気候変動に関する調査、アラスカ、カナダの少数民族や英国の各種環境教育プログラムを題材に、土地と人とのつながりに注目した研究活動を行う。

「地域に根ざした教育」の重要性と「農山村は学びの宝庫」を訴え、2007 年より「TAPPO 南魚沼やまとくらしの学校」事業を開始。



皆さんこんにちは。高野孝子といたします。今回は冒険探検活動と絡んだ自分史を話してほしいと、そしてその中で環境といかに関わっていくかということを紹介してほしいということでやってまいりました。40 分程使いましとお話しさせていただきます。写真をたくさん持ってきたのでそれを使いながら話を進めていこうと思います。

みなさんに配られています今日のプログラムを一枚めくったところ、私と関野さんの略歴の後、現代英国への遠征と書いた記事があります。それはだいぶ前に書いたものなのですが探検部の方が今日は多いということを知っていましたので、探検の発祥の地でもあるイギリスの学生たちがどんな事を言っているか、参考にさせていただければと思います。今日は、最初は自分がどんな光景を見てきたかというところからお話していきたいと思います。

#### 〈グリーンランドでの旅〉

この写真はグリーンランドです。氷河が浮かぶ中、地元の漁師さんと一緒に狩りに行ったときの写真です。だいたい 20 代前半から約 10 年間、地球の中のいろいろなところを、いろいろなやり方で見るという機会が私にはありました。これは見たとおりのペンギンです。南極で皇帝ペンギン、ペンギンの中でも一番大きな種類ですね。小学生 1 年生くらいの背の高さがあります。奥が南極大陸になっていて手前にペンギンがいます。こういう光景の中、旅をしました。これも南氷洋です。太陽がまさに沈もうとしているところです。このあとグリーンフラッシュというものを見ることができたのです。太陽が地平線に沈む瞬間に緑の閃光がパッと走る時があります。それはある一定の条件がすべて折り重なった時にしか見られないということで、私と一緒にいった科学者の人は 10 回くらい南極に来ているけれど

も初めて見たと言っていました。とてもラッキーでした。南極を旅しながら、生態系のことを考えました。皆さんの中で冒険・探検の定義はバラバラではないかと思うのですが、この時私はいわゆるスポーツ的な冒険として行ったのではなく、南極大陸の中で、陸から一番離れた所まで航海をするというプロジェクトに加わって行ったのです。その旅を通して、人が人工的に物資を全て持ち込まないと住むことができない、そこにあるものだけでは暮らせない、そういうところを旅しながら、特に生態系の繋がりといいものがすごくよく見えました。

#### 〈マダガスカル島でのサバイバルレース〉

これはアフリカのマダガスカル島なのですが レイドゴロワーズというレースに参加したときの写真です。レイドゴロワーズって聞いたことある方いらっしゃいますか？フランスで生まれた、いわゆるサバイバルレースです。女性が1人以上を含む5人一組のチームで旅をするのです。どのチームが一番早くゴールするかを競うのですが、スタートで集合するまで、そのマダガスカル島のどの地域で何をするかは知らされないのです。マダガスカル島というのはすごく大きな島で砂漠もあれば熱帯雨林もあります。もちろん海も山も川もあります。まずどのあたりなのだろうということを推定して、かつどこにでも適応できるような装備を準備しなくてはいけないし食糧も準備しなくてはいけない。レースですからできるだけ軽く、テントなども持たずにどうやって早く移動できるかを考えなくてはいけない。事前の準備から全てレースの要素になっています。行ってからは地図を読みながら、地点を区切りながら行くのですが、私が行った時には、日陰で計っても気温が60度ぐらいまで上がるのです。これは主催側にも想定外の暑さだったようです。地図の上でかなり大きな川を見つけて、そこまで水を汲もうと思ってわざわざ行くのですが、そこが干上がっていたりするので。そういうすごい状況で旅をさせてもらいました。

初日からレスキューのヘリが上空を飛びまわっているような状況です。いろいろなところからチームがSOSを出してレスキューされているのを見ながら、実は私たちのチームも初日に熱中症になりかけた人が2人出て、夜を越すのもやっとの思いでした。翌朝にヘリに来てもらってレスキューしてもらいました。残りは3人で旅を続けたのですが、チームとしてはもう失格なので、できるところまで行こうということで行きました。その中の一コマがこれです。岩場を渡っているところです。こういうのも全く知らされないのです。どんなルートなのかは行ってからでないとわからないので、自分たちが持つ全ての技術とノウハウを使ってやるわけです。当然マダガスカル島がどんな気候でどんな地形で何があるのかというのはできる限り研究して行くわけですが、やっぱり生まれて初めて行く場所なのでチャレンジの連続です。それでもそれがレースの面白い要素です。本当にトップを争うチームは違うでしょうが、レースといっても、主催者側の狙いもこんなことでもなければ絶対に行かない場所を旅するチャンスというふうにとらえてほしいと言うし、私たちもそのつもりでした。バオバブの木が森になっているようなところを歩いたり、そこに竜巻がたったり、そうかと思うと一変して恐竜が出てくるのではないかと思うような岩場を延々と歩いたり、ときにはワニがいる川をカヌーで下ったり、最後はシーカヤックで行くといったような旅をしました。夜は活動を止めなくてはいけない時間があるのですが、あるとき、岩場でビバークをしていたら突然雷雨になってしまったのです。本当にあのときは目を覚ました時には生きていないかもしれないという思いでシュラフカバーの中にいました。

#### 〈いろいろな民族との出会い・暮らし〉

グリーンランドは未踏峰だらけです。でもグリーンランドには人が住んでいて彼らにとってみたら、

その山の上に登るということは別に興味のないことなのです。グリーンランドの人々は海岸線に住んでいます。そこで一番食糧が取れるからです。グリーンランドの中央部は全部氷で覆われていますから、そこにはせいぜいいるとしてもシロクマくらいで、人がちゃんと暮らしていくには海岸線が一番いいわけです。氷がなくなった時には船やカヤックで漁に出たり、植物もいっぱいあるので採ってきて、油に漬けて入れて保存食にしたり、ベリーを採ったり、貝を獲ったりして暮らします。地球上いろいろなところに行くと、それぞれいろいろな光景があって生き方があって、子どもたちも日本のように学校と塾と家を往復する子どももいれば、こんな風に岩場で遊んでいる子どももいるのだなど行く度にそんなことを考えます。

これは魚です。手のひらくらいの魚で、これが入り江いっぱい流れ込んできます。それを網でどんどん掬って石の上で乾かしていく。たまには鳥が食べているし波がかかってしまうこともありますがお構いなしです。「鳥も生きなくてははいけないからね」なんて言いながら生活しています。これはサメの肉を干しているところです。サメの肉は犬のエサになります。グリーンランドでも特に東岸の人たちというのは犬ゾリを使います。「どうしてスノーモービルを使わないの？」と聞くと逆に不思議そうな顔をして「どうしてそんなことを聞くんだ。モーターなんか使ったら動物たちが逃げってしまうじゃないか」と言って未だに犬ぞりやカヤックを狩猟のために普通に使っています。

場所が変わりましてこれは西太平洋のミクロネシアです。たくさんの島の中の一つです。ここは自分たちの選択として現代的な機械文明を入れていない島なのです。このカヌーも全部この島で採ってきて自分たちで削りだして作ったカヌーですし、モーターももちろん積んでいませんし、これで漁に出ます。だから当然獲る量は限られます。逆に島で分けるのに十分な数だけしか獲りません。文化が違くと大人と子どもの関係も違し子どもが期待される役割や態度とかも違ってきます。

これはシベリアのチュクチ民族の女の子です。パッと見ただけだと本当に日本人ですよ。今は町に住んでいますが、一歩町から出るとこういう世界が広がっていて、動物と自然と一緒に存在しているところです。

これも同じチュクチ民族ですけども、もう少しベーリング海峡に近いところです。ソ連が崩壊してロシアになった時にここが一番クレムリンから遠いところなのです。チョコト半島ですが、ここはかつて鉄のカーテンというのがアメリカとの国境におりていて、軍事的に重要な場所でした。そのときはものすごいお金がすぎ込まれ、兵隊がここにたくさんいたため、住んでいる人たちにとっては物資が豊かにありました。だけど同時に自分たちの伝統的な生活を全部禁止されました。例えばクジラ漁やシャーマニズムも禁止されました。それと引き換えに物とお金がどんどん渡される。だから当時モスクワでパンを買うために行列ができていても、チュコト半島に行けばキューバから来たバナナや生きたニワトリなど何でも手に入ったんです。そして家にはテレビやビデオなどの電気製品が十分ある。でもソ連が崩壊したとたん全てがパタッと止まってしまったわけです。お金もガソリンもなくなってスノーモービルも乗れなくなってしまいました。お店に行っても買うものがない。そうしてこの人たちがどうしたかという昔からの知恵を取り戻そうとしたのです。しかし、2世代くらい過ぎてしまっているので、現役世代はわからないのです。だからお爺ちゃんやお婆ちゃんたちに聞いて、もう一回大きなボートを作ってクジラ漁に出たり、犬ゾリを復活させたりしました。このソリも流木やアザラシの皮で道具を作ったりして全部自分たちの手で造ったものです。

#### 〈北極海横断の旅〉

これは北極海を横断したときのスライドです。北極海を犬ぞりで横断しましたと言うと、楽しそうだ

ねと言われます。ツルツルのスケートリンクの上を犬ぞりでシャンシャン行くイメージにとられがちですが、実態はそうではありません。海に浮かぶ氷はまやかしなのです。あるように思えても実際はないのです。次の瞬間なくなったり、全くなくならなくても割れてしまうのです。自分たちが行こうとしているところにいつまでも氷があるとは限りません。私たちは3台で行動しましたが、3台すべてが同じ場所を通れないことも何度もありました。長い犬ぞりが振られて、そこにクレバスがあったりすると落ちてはまってしまって大事故になってしまいます。もしクレバスに落ちてしまったらそのロープを切らないと犬たちも一緒にソリと落ちてしまうわけです。ソリにはテントや寝袋や食料や燃料、そして犬の餌だとか二人分のすべてが詰まっています。つまりこれをなくすということはかなり厳しい状態を意味します。例えばこういうところではレスキューはできません。たとえレスキューを呼んでも着陸できませんから。だから北極海横断の旅と言うのは、何でもそうですけど、死というものを否定しません。万が一の際は遺体をどうしてほしいかという同意書を書いて行くのです。高所登山と一緒にです。この旅は出発から4ヶ月かかってゴールしました。

犬と一緒に暮らしたというのは面白かったです。信頼関係に基づいてチームワークを築いていかないとダメです。犬と人間も含めた信頼関係を普段からしっかりしておかないと、いざという時に動いてくれないのです。

マイナス50度から始まった旅だったわけですが、マイナス50度だとウィスキーでさえ凍るということをここで発見するわけです。北極海を横断したときに、まだこのときにはワンシーズンで横断した人はいませんでした。科学調査の結果を集めて、雪、気温、氷の厚さについては調べて行きますが、マダガスカルでもそうだったんですが、どんなに調べてもやっぱり行ってみないとわからないことだらけです。その時その場所によって特徴が違うので、その時に対応できるように準備をしていかなければいけません。まったく未知の自然条件のときはビクビクしながらそこに行きます。

最初は北極点を目指して行って、北極点を通ってからは南を目指していきます。常に氷は自在に動いています。北極海の深さがだいたい平均して3000メートルくらいあって、氷の平均の厚さがだいたい3メートルくらいと言われています。3メートル対3000メートルなので、比べると海にとって氷は木の葉みたいなものです。なので、氷は海流によって口を開けたりぶつかって山になったりします。道中、犬が落ちたり、もちろん人も落ちることがあります。こういうのが北極海横断の旅の日常の光景になるわけです。

これも北極海のカナダ側の写真です。これは3月ぐらいですかね。太陽がまだあるので午前2時くらいです。このまま太陽はゆっくりゆっくり沈みます。少し隠れますが、隠れたらすぐに昇ってきます。なぜこのような時間に旅をしているかというと、私たちの隊には黒っぽい毛の犬が多かったので、昼間の太陽が暑すぎるのです。だから昼夜を代えて夜移動していました。昼間は暖かくて明るいし夜も白夜でこのような状態なのでいつもうつらうつらしている状態でした。こうやって2時3時くらいに旅をしていると割とリズムカルに行けるときのあって、光も神秘的で、そんなときは特に気持ち良くて、透明な空気の中で太陽が傾いて行くときの光の色というのはものすごく色々変化するのです。それを全身に浴びながら夢見ているのかなと思いつつ旅を続けていました。

これはオーロラです。北極や南極は白夜と極夜があって、夜が長いときにはオーロラがすごく綺麗に夜空を飾ってくれます。ただ、オーロラが一番きれいに出る時というのはいつも本当に眠い時なのです。そのような中でも無理してカメラを持って外に出て行くのは私くらいで、仲間たちはもういいよという感じで寝ている人たちが多かったです。

〈なぜ旅をするようになったのか〉

今ざっとですが、南から北から私が行った場所の一部の写真を見てもらいました。私の旅というのは、冒険探検がしたくて行くというよりも、その自然と密接して暮らしている人たちに会いたくて行くことがほとんどです。そういう人たちから学ぶものが面白くて、同時に自分自身がそこで何を学べるか、生きていけるかということも面白くて、それがたぶん私が旅に行く理由であると思います。

最初にほんの少し私の旅を見ていただきましたが、このようなことをするようになったきっかけというのをご紹介しようと思います。これは私が23歳のときです。私は探検部ではなく、高校時代までバレエ部に所属していて、大学一年の頃は私が新潟県出身だということだけで競技スキーに誘われて、嫌でしたので留学をしたいという理由でやめて、それからはバンドを組んだり、雑誌を書いたり、そういう学生時代を過ごしていました。しかしその後、大学院に通い始めた頃から自然の中で活動するようになりました。そのきっかけがこれです。これはオーストラリアのグレートバリアリーフというところで撮った写真です。どうしてこんなところに行ったのかというと、イギリスに本部を置くある団体がやっているプログラムで、いろいろな国の若者を集めて3ヶ月間共同生活させるのです。その3ヶ月間に科学調査、奉仕活動、冒険活動をするプログラムに参加していたのです。応募したころには大学の5年生で、合格して実際に行くのは翌年でしたので私はこれに行きたくて就職をしなかったのです。就職しないでどうしたかということ、大学院に入ったのですが、もちろんこのプログラムに参加したかったというのもあったし、民主主義について調べたいと思ったのもありました。プログラム期間中は、全部で130人くらいの18~25歳までの人たちが小グループに分かれて活動しました。小グループでの日本人は私一人でした。全体ではイギリス、オーストラリア、シンガポール、エジプトとか12カ国くらいの人たちが参加していたのです。やったこととしては、まずアイルランド移民がかつて建てたという農家を再現して観光スポットにするというプロジェクトです。誰も大工の経験もないし、どうしたらいいのか分からないという感じで始まりました。その中でさらに言葉もよくわからない私に、グループリーダーをやるように言われ、おたおたすることから始まりました。こういうプロジェクトをやったり、森の中で暮らしたりしました。もちろん電気も何もないところですよ。自然の中で暮らすと言われてはいたものの、自然の中で暮らすとはこういうことかと初めて理解できた体験でした。水をどこで確保するのか、シェルターをどうするのか、食べ物をどうやって確保するのか、燃料はどうするのか、そういうことを全部自分たちで考えなくてははいけません。しかし、自分たちでもできるということがわかって、人が暮らすというのはこういうことであるというのがよくわかりました。それからマッピングをするプロジェクトに関わったり、アボリジニーの子どもたちに会ったりしました。私は23歳だったにもかかわらず先住民族の問題をあまりよく知りませんでした。でもここで初めて、世の中には不当に差別を受けている民族がいるということに気付いたのです。体験的に知ったこの衝撃は大きくて、このことがきっかけでいろいろな文化というものにもものすごく興味を持ちました。もう一つは3カ月という長い期間、日本人は私だけ、いろいろな国のいろいろな文化や宗教を持った人たちと暮らすことは、やはり簡単にはいきません。一週間くらいならばなんとか笑って過ごせますが、やはり三週間ももちません。例えば、ご飯の炊き方が気に入らないとか、いびきがうるさいなど、そういうつまらないことで喧嘩をするようになるのです。しかし、そのおかげで違いを受け入れるということをも自分の根っこに持つことができるようになりました。自分の常識は人の常識とは違うということを知ったのです。そしてこの後のすべての旅で、これがすごく役に立ちました。この後世界中いろいろな所に行って驚くことがたくさんあるわけですよ。でもそれが楽しい、自分の世界が広がった、と思えるようになったのです。

海の中に潜ってサンゴ礁が壊れているところを調査してその原因を調べて、サンゴ礁が壊れないよう

にするというプロジェクトもこの中の一つでした。こういう生活をしながら、人がどうしたら生きていけるのかというような根本的なことを考え、人間は健全な環境があれば生きていけるという事実を理解できました。いろいろな方法で環境が破壊されていることも、今までは他人事だと思っていました。しかし、こういう生活を3カ月して、そうではないということがよくわかったのです。海の中の不思議さ、海の下の景色の凄さにもものすごく驚きました。そのとき私たち自身が素朴な暮らしをしていて、川の水を汲んできて煮沸して飲んだり、滝つぼで水浴びをしたり、本当に自然に近い生活をしていると人間なのか動物なのかその境がどこにあるのかわからなくなってきました。だから海の中でウツボとかに会っても別に怖くないのです。たぶん感覚的なことだと思いますが、危ないことと危なくないことを人から言われるのではなく、自分で判断できるようになる力というのが自然の中につくのではないかと思うのです。地球上で人間が占める位置というものをここで感じたわけです。たくさんの命の一つであると。

これも仲間と撮った写真の一枚です。私は全く英語が上手くないのですが、関係なくなってしまうのです。世界中にはいろいろな人たちがいますが、「平和」は可能だということを実感しました。これが多分私の原点で、世界中で難しい紛争とかが起きる中で、もうダメかと思ったときでも、立ち返ることができる原点になっていると思います。ある条件が整えば人は協力できるし、反発し合っても共存はできるはずであるというのを学ぶことができました。

#### 〈アマゾン川での体験〉

この旅を終えてからも私は様々な場所に行くのですが、その最初の旅はアマゾン川でした。男2人女2人の4人で出かけました。調べても情報はあまりないのです。何とかなるかなと思って行ったのですが、初めての体験ばかりで最初の3日間くらいはその環境になじむことで精一杯でした。雨の降り方などはわかるまでが大変でした。

ペルー領のアマゾン川と呼ばれる手前の流域を下りました。この熱帯雨林の中を大蛇のように川が流れているのです。「こんな所を下るのか」と萎縮して飛行機を降りたら、水槽の中にあるようなものすごい湿気なのです。べったりした空気に嫌な感じがしました。とりあえず川に行ってみようと川に到着したら、大雨の降った直後でもものすごく大きな巨木がどんどん流されてきていました。こんな川を下ったら死んでしまうかもしれないと思って止めようとも思いました。仲間について帰ると言おうか考えながら買い出しをしていて、言い出せないままとうとうカヌーが岸边を離れて行って、「もう早く下って早く帰ろう」という一心でした。あのときは本当にそう思っていたのを今でも覚えています。バナナが植わっていたら人がいると思えという原則があって、私たちは常に飢えていたので、バナナがあって人がいると思ったらそこへ行って食べ物や寝床をもらおうと考える目安になっていました。川岸を眺めると、川がどんどん水流で削られていく様子もよくわかりました。そこで見えたのは表土がものすごく薄いということです。基本的に砂の薄い表土に木がものすごく一生懸命根を張って立っているということがわかり、アマゾンで木が倒されて問題になっているというのはこういうことかということがよくわかりました。切り倒され方によっては次に生えてこないのです。それから立っているために根っこを一生懸命張っていますから隣の木もやられてしまいます。だから人が考えている以上に破壊が進むということがよくわかりました。

アマゾンでは三つのことが怖かったです。まず太陽の光です。川を下っているときは日影がないので直射日光を浴びながら下ります。私たちの持っていた温度計は40度までしか測れなくてももう朝の9時を過ぎると振り切れてしまうのです。だから実際に何度だったのかはわかりませんが、その熱の中を行

くので火膨れでオールが握れなくなります。また、熱中症です。私も危ない時があつて、これで休んでいなかったら倒れていたかもしれないというときがありました。

二つ目は虫です。マラリアです。でもマラリアが怖いというよりは蚊の大群そのものが無条件で怖いものでした。私よりももう一人の女性のほうが多く刺されました。でも彼女も一カ月経ったら刺されても治るようになってきて、だから人の適応能力のすごさがわかりました。人によりますが、一カ月いられれば大体その虫刺されというのには馴染んでくるというのが私の仮説です。でも私は全然大丈夫でした。たぶん小さい頃から刺され慣れていて、蚊の種類が違っていても多少は免疫があつたのだと思います。

三つ目は雨です。さっきも言ったようにスコールが来るのです。ずっと続くときは本当にどうしようもないです。最初はどうしたらいいのかわからなかったのですが、そのうちスコールは過ぎ去ることがわかってきました。とにかく雨が降ってきたら近くのを何でもいいから握って15~20分しのぎます。そして、手の空いている人がコップとかで水を掻き出す。そういうことがだんだんわかるようになってきて、旅を進めていけるようになりました。

地元の人たちも川の流れを利用します。そして物を頂いたりします。基本的にはこの旅はアマゾンの人たちにお世話になりっぱなしの旅でした。想定していた通りには行きません。本当はもともと持ちこんだ食糧を現地でキャンプしながら料理をして進もうとしていました。乾いた木がなかったり、持ち込んだガソリンの質が悪くてコンロが根詰まりして使えなくなったりしました。ハンモックで寝ようと思っていたのですが、蚊が多すぎてそもそもここで寝るために使うものではないということの後で現地の人から教えてもらいました。とにかくどうしようもないことばかりで、2日目くらいから家に上げてもらうようになっていました。食糧を分けてもらったり燃料を分けてもらったり、他人の火と書いて「他火」と、そういう旅をしてきました。

#### 〈現地に暮らしている人の知恵〉

人間どこに行っても水がないと暮らしていけません。私たちは日本から濾過機とか塩素とかをいっぱい持っていきました。でもまずくてしょうがないのです。安全だけど飲む気がしないくらいまずかったです。村の人たちはどうしているのかと思うと、すごく酸っぱい果物を水に絞っていました。アマゾン川の水は茶色く見えるのですが、実は表面上に細かくなった砂とか土があるから茶色く見えるだけで、バケツに掬って置いておくと汚れが沈殿して上澄みは透明なのです。考えてみたら上流に工場もないしトイレも川の中でしないのできれいなのです。それで、上澄みにこの果物を絞るとすごくさわやかになりました。たぶん殺菌作用もあると思います。それを知ってからは平気でアマゾン川の水を飲むようになっていました。こういうことも地元の人々の知恵です。そこで生きていくためには地元の人たちの知恵というものは欠かせません。それはどんな旅をしていても思います。

関野さんと一緒にチュクチの人たちのところへ旅をした時も痛烈に思いましたが、私は例えば北極海を横断したとか言ってもやっぱり彼らには敵わないのです。そういう北極海横断だとか高い山に登るといのはすべて外から持ち込んだものだけに頼ります。だけどチュクチの人たちと旅をしていたら、彼らはテントも持たないし寝袋も持っていません。コップ一個だけ持ってあとはナイフと銃だけで、ソリに乗って旅をするのです。必要なものは全部そこで手に入れるし、着ているものがテントになり寝袋になるのですごく合理的な旅をしています。それを見て、自然の中で旅をするというのはこういうことなのかと思いました。外から持ち込んだ物でガチガチに自分を防御するのではなくて、そこを普段着で旅ができるというのが実は一番すごいことではないかと思うのです。

いま私は若い人たちとあちこち旅をしたり沢を登ったりします。若い人たちにはできるだけ普段着で行こうと言います。わざわざウェットスーツを着て沢に行くのではなく、普段着ているもので、冷たいものは冷たいとわかり、風を感じ、足で地面の感触を感じ、そういうような自然との付き合い方がすごく大事ではないかと思います。怪我をしたとか、体がうまく動かないとか、そういう動きを補佐するために道具やプロテクションをつければいい。自分が自然の中で解放される感覚を研ぎ澄ましていくためには、そういう意味で自分もできるだけ自然に近い形で接していくやり方が一番良いと思っています。

#### 〈高野さんの学校での実践〉

みなさんに時間があればお話ししようと思っていたのですが、いま私は早稲田大学で教えています。その人たちと一緒にヤップ島というところに行きます。石のお金を使うところなのですが、大学の授業の実習として行き、村の中で伝統的な暮らしの中に入れてもらうのです。自給自足に近い生活、そして自給自足が可能な場所なのです。ここの人たちも鉦一本で外で生きていける人達です。飲み水や食糧から生活用品といった道具まで全部鉦一本で作ってしまう人たちです。そういうところに学生たちと一緒に行って、学生たちがどんな事をしだすかというのを紹介しようと思います。去年の学生たちの報告書がありますのでよかったら見てみてください。学生たちは探検部でもない普通の学生です。そんな学生たちが島の人からいろいろなことを学びながら、ここで生きるというだけの体験なのですが、いろいろなことに気づくのです。去年の学生たちの場合、私たちが今まで使っていたものとはそもそも何だったのだろうかということになり、必要なものは自然の中に全部あるのではないかということを考え始めて、今ヤップで起きている問題に気づいていきます。ゴミ問題です。そのゴミも日本の製品がすごく多い。自分たちがそれを何とかできないのか。ヤップは第二次世界大戦で日本兵がここにいた場所でもあり、そういう繋がりやいろいろなことから彼らは突き動かされていきます。何か自分たちでしたいと。現地でも村の人たちに廃棄物の問題をお芝居で表したり、帰ってきてからはまず自分たち自身の社会について知らなかったということで、自主企画で清掃工場に行ったり水の処理施設に行ったり、ヤップでゴミとなっていた製品の企業にコンタクトして処理しやすいようなパッケージに変えることはできないかという働きかけをしたり、そういうことをしました。それはやはりこの島で暮らしたという体験がもとになって彼らが動いたわけなのです。

#### 〈旅とは〉

目的を持って旅をしなくてもいいと思います。しかし、旅先で出会ったこと、見たこと、聞いたこと、知ったこと、そういったことから皆さんがどういったアクションを起こすのかが、すごく大事なことではないかと思います。一人ひとりがこの地球社会に関わるはずなのです。私も含め旅ができる人、旅をした人間というのはある種の責任を持つと私は思います。そこに行くまでにいろいろなサポートがあって行けるわけで、燃料も使って行くのです。それはやはり何らかの形でお返ししなければいけないというのが私の思いであり、そういうつもりでやってほしいと思います。

ありがとうございました。

(会場拍手)